かゝ寿

目次
みしか夜
笹舟
裏なし
梔花
朝つ
寝くし
髪染

光香影音

挿畫目次

落島武二作

小扇

與謝野晶子著

みじか夜

われと歌をわれといのちを忌むに似たり
戀の小車(をぐるまいと)さらに卷け

數の罪の名知らばとくに老いぬべきを長
しと愛でし髪よ幾とせ

枕それし晝のかりねの夢や夢戀する人に
春雨ぞ降る

澤瀉は少女の櫂にのりこしぬ君が醉歌の
七尺小舟

めしひなれば道と誨へで往かしめよおど
ろ變じて百合となる門

おもはずや濡るれば髪のやはらかき雨ふ
る春を道にやつるる

君さらばさらば二十を石に寢て春のひか
りを悲み給へ

御僧追ひてきせかけまつるわが小傘すす
きに白き夕雨の秋

鷸鵡うちし紅水仙の花の萎へかでとの朝
の人と鳥と見る

瀬田いでて宇治に流るる春のみづ柳なが
うて京の子みえぬ

戀に老いし神のぬけ羽の身はここに小羊
君が檻の幸よむ

池におちて紅きが多きおちつばき鶯鳥か
ひにし家の岡崎

海に入りて海にさくべき春の君と或ひと
見たる白牡丹の花

手に満ちては幸に泣きしを人も知るや矢
ひし笑みぞ詩に不如意無き

草ちかうよき蚊帳たれし竹の椽妻に眞白
の扇ゆるさぬ

友は人に摘まれぬ我はたふとくて聖の宮
居にいつかれ白百合

旅のきみ君あさ髪の裾によれ露のさむき
に誰ぞ君をやる

妻わかうて京のなまりの失せがたな二條
に似たる街の春の夜

尼の君に水しち蓮の夜あけ舟京の几董が
詩のけしきかな

春むかし夢に人見し京の山の湯の香に似
たる丁子の小雨

雪の箱根こえこし瘦の都びとを掩ひの紅
絹に梅ちりし國

平和の神の御帖に名もあらむとおもふ我
ぞ老いにけらしな

醉へる蝶は小百合のほかに花しらず幸あ
るかなや瞳ちさき君

垣のふた葉ある夜南歐の旅びとの壁にの
こさむ名の後あれな

大和こゆる歌のひと夜の長谷の御寺雨よ
細うは降りにしものか

もとめむの水はいなみぬ戀さらに秋のこ
とばを石に語らせむ

百二十里かなたと星の國さしし下界の京
のしら梅月夜

初日かげわがこの君を誰にやらむ北なる
帝に戀は足らずよ

しら梅に妻袖ながきわか水やひがし幸は
げ笑ます詩の朝

祈り得し後のひと夜の春の人みじかき春
の人に梅ちる

縹色さびし森の被衣に戀のむかしわかき
武藏を小川かたる日

をしへます二十は知らず袖でまり妻には
あらぬ美くしき子ぞ

病むひとの母屋のすだれに螢やりて出づ
る車の君が夏姿

芍藥に毒さす夜の濃青雲はしるすがたに
笑む子見つるや

歌しらぬ身は要もなき夕ぞとうたた寢な
さむひと時たまへ

讃せむにふん名は知らず大男花に吹かれ
てゐはす東大寺

夜の室のしら梅透る八重ごろも御母の神
に夢よはぐるな

鐘につづくやさあしあとの堂の階陀羅尼
日傘のなかにさそはむ

草に長き流の秋のふる川や緑に去りし夢
の浮ばぬ

母にいにし昨日の魂や闇にまどふしら梅
ちさき戸はうすみぞれ

わかき君のきさらぎ寒の堂でもり勢至菩
薩に梅ねたまれな　（泣菫の君にまゐらせける）

朝の湖に紫ときし春の君くろ髪君に夢き
く秋か

手に袖に裾ににほへの夏のうた榛の小百
合に宵ふけらせよ

人泣かせてわれと泣かるる恨おほき里居
しぬればおとろへぬれば

春の夜を化物こはき木幡伏見相ゆく人に
宇治は貳里の路

山吹の岡に伏目の春さめ雲きてうぐひす
が上羽を洗へ

春

彩

春ゆふべそぼふる雨の大原や花に狐の睡(ぬ)る寂光院(じやくくわうゐん)

忘れては柳にあゆむ大河(おほかは)ぞひ人の船夢(ゆめ)の

ろふ子ならぬ

かくの別れ秋に心をもたざらばゐにしは

蘆のひと夜とやちど

わがこころ何を追ふらむ片まどひ凝らす
ひとみにはてし無き闇

山ずみの深き井をくむ春のくれひと重山
吹わが戀ごろも

二の尼の紫衣にゆふべのうずざくら御供
養はてし松が岡出でぬ

草の戸の西うす月の京は百里庭のしら梅
母にちる夜か

連翹のとなりへそれて鶯は啼かず小竹に
降る春の雨

躑躅あかき春眞言の大寺や山に浪きく西
の讃岐路

袖もろとも枕きては人ぞやはらかき腕し
ろうて心飢ゑざる

うながされし嵯峨はゆふべの水のさと兄
訪ふ人にちひさう添ひぬ

旅のなさけ春野の水のながれぶし人は近
江へ梅暮るる京

くちきかたにそちどけ長き宵の髪はべる
ともなきしら菊の里

集に見るはみどりの春の夢すがた色なき
石を巻く鬢の毛よ

ひとすじにあやなく君が指おちてみだれ
なむとす夜の黒髪

二もとのおごりぞ過ぐる松の君初日のか
どは美くしき歌

寒水に水仙きりし沙彌の袖もとより墨の
袖と忘れぬ

君が榮は紅のゐんゞの夢さまざま春を歩
むに人才つたな

夜の牡丹うこむのきぬの香にやむせぶ螺
鈿七尺藤の御屏風

春日いでて北藥師寺の杖の辻あゆみおく
れて桃をねたみし

あと暗う去れなと云ひし昨夜の夢の中の
一つを西野に追はむ

みだれ髪ふもひ動くぞ秋によき戀の二十
を袂に祕めな

詩の愛着(あいちやく)よる方(かた)くらき子は幸(さち)無二十(はたち)を出
でし野の夕まよひ

はてり、ふごり、笑みよ、問はずもありぬべし
泣く日は我に戀やはらかき

ひと夜ゑにしひと夜の章の繪かたびら袖
みづいろのひと夜みドか夜

笹舟

夏舟のうき葉の水の夜も見しか蓮なき里
に人髪老いぬ

春むかし緋ざくら立てる花かげに少女の
我となりにける里

垣たまたま連翹黄なる春の小徑小雨の里
の人に寄りてし

春の窓よるふる雨のささやきや琴にさし
櫛ふれにけるかな

こむらさきうすれむらさき野の雨にわれ
と別れし魂たそがれぬ

春の袖かざすに額の榮しらぬ黄雲ゆるゆる大和へ越ゆる

かつる裾にしら梅きゆる春髪の五尺を歌の妻が二十よ

夜は雨にわかたむ夢は坂こえず碓氷のあなた里の名も知らぬ　（人の信越の旅にあるに）

門川にいくたり見たる朝髪ぞ老いにけらしなわが戀の夢

告げたまへ伽藍の九月興いかに金の柱に春を病みし君　（寺に入りし君に）

夢に得て西を追ひにし小傘なき子ながれ空しく人おもはしむ

西かぜよ秋野にあまる少女ごろ片うつ
ろひを髪にもとむな

橋すぎて出町になほも二人なりき京さむ
からししら梅月夜

世や春や遠きゆふべや小皷に御池の花の
船の子なりし

楓こみちわかきふたりは御供の子眞淵の
墓の南品川　（萩の家先生のみともして）

たのもしう米山こえて見む雲にうつれと
撫でし髪にやはあらぬ

春とのみいなせし興を追ひわびて桃に指
かむたそがれの壁

夏

動

層塔の春曉靄のかたむちさき岡崎朝の御
夢に入るや

梅にしのぶ頭巾なさけの水淺黄浪速は闇
の宵の曾根崎

黄金雲は精舍花ちるかぎろひか山の夕鐘
京にはぐれぬ

京の山を東へ歌の君やりて身はしら梅に
たそがれの人

誰ぞ誰が子細江舟やる一重ざくら月の旅
ぴと戀なしにして

とある夕畫師のちからを小指かみてのろ
ひけむよの秋ひろ野原

詩僧すむ牡丹の寺の春の客玉潤ならぬ妻
とかくれし

土しろう落つる椿のゆふづき夜野はづれ
寺によき僧入りぬ

朝の戸のその子あまりに口疾なりし緋桃
かしこく日記いつはらぬ

具されびとの一里は遠き柳はらながれ二
すじ月の春の夜

そがひ柱わが名きみよぶあまたたび夕海
棠よかごとをしへむ

堀河や築土しら壁梅わかば姉をはなだの
被衣に賜びし

（姉君を京に迎へたまへる水窓の君に）

姉の世に二つをとりし弟君の歌のかはき
を泣かれぬる夏　（おなじ君に）

宵の子は頭巾をしむゆひそめ髪涙華の
街の南に長き

二條北に大路の月の今出川梅は寒しと倚
りにし宵か

夏川はよき子が歌にこぎや馴れし紅花つ
む君が里の夕舟

宵の歌は君に負けたるもえぎ蚊帳虞氏の
朝ぎぬ花あかき庭

涙華江の後のひと夜は梅にかれなふた夜
は歌の吉備の若うど　（そこにて逢（る萩舟の君に）

北生駒葛城たかきはかな雲ひと夜の繪師
を東へやりし

影や紅にのこりあやぶむ聖の壁となたし
たまへ眉はそき君

花の山居あやにく人のわかうして髪の油
のうすし春雨

ここの水に柳葉舟のちさき思へその夜を
往きし紅梅の神

才の君戀に耻なき髪五尺歌につなぎて敢
てはなたト

詩の春の二十むつまト高野川柳わが髪彩
波つくる

もろかりしそは一昨年の歌に泣きしもろ
かりにしの人と暮るる年

御墓御墓梅によこぎる谷中みちひそかに
呼ばむ名の趣味もたぬ

ゆふべ毎の小舟戀なき川なりし和泉をめ
ぐる水と見る流れ

春老いては鏡にもらす歌ぞ多き二十なり
ける湯の山の宿

母遠うて瞳したしき西の山相摸か知らず
雨雲かかる

母いつく春をうちやむ梭のうた籔をへだ
てし小椿の家

こむらさき春狎れやすき神と見て御袖に
そへし詩長きばかり

ひきまゝすや朝連翹の春の御戸ゆるせなふ
たゞ歌に寢たらぬ

明日もたぬ露の武藏の草ごもり人わかう
して夢によろしき

藥師籠り御藥師佛を君とよびてしだれ緋
桃の日記つむ御堂

返し歌の春よき里の里かりね緋桃二十日
を花ちらぬ里

梅は鬢によき香おもねる朝いぶすま啼く
にうぐひす寵わすられむ

こぶるに笑み痛むるに戀よぶに歌かくて
桂の葉にふさふ我

しろ百合にしらぎぬきせて溪を出づと誰
が子はたちの山の湯の御記

花みなに眞紅さかする夏のちからいつ移
りてと血におどろきぬ

戀は紅梅詩はしら梅の朝とこそ湯の香に
明けし春の山物語

花ぐさにひと夜がたりの頰のほつれ濡れ
てぞ雨よ母に歸らじ

二十びとの夢のながれの小筏舟いささか
君を春に導かむ

夏ばな

わかき夏の日には得飽かぬ金蓮花その温
室みむに鍵もたぬ君
誰が集に誰に秀でし驕りなりしまして思
へば去年の夏花

石津川ながれ砂川髪をめでてなでして添
へし旅の子も見し
蚊帳に君をおきてふた夏蓮とりて出でて
は京に紅買ひし里
春日ながし雛のあるじが母とならむ願の
君のうたたねまもる

竹をくぐる椿の水の小板橋たそかれ見ず
や紅梅の人

歌は問はじ命婦の職か辨の君か眉黛せめ
て濃く打ち給へ

（以下二首〜ら梅の君の京に仕へたまふに）

梨の夜の簫に優頬はしめるとも四位のひ
とりに歌やりますな

秋

靜

垣ひくし小椽の書のうたたねの和魂さそ
へ八重いと櫻

蚊帳を人にかけての君が戸ざし頃を根岸
へ啼くな野のほととぎす

この里の稚兒うつくしき小笹垣根花環を
妬む妻をかこたぬ

春の湖髪よき人の夢の魂を載するしち桃
水笹に遣るな

日かげぬるう海の香ひろき磯林ある夜の
潮梅に寢し戸か

挑を春にほつれ毛あぐる笠の手よゆふべ
しら壁なにしるさする

誰ならず孔雀のひなに名おはしぬ我やお
でりの北のおばしま

そと見たる嫉みうつくし草染のひだり袂
に投げ入れし神

山でらの李はなちる月夜みち笛にひとり
をのこして下りぬ

川ひとすゞ菜たね十里の宵月夜母がうま
れし國美くしむ

殿のあめ紅梅くろう君しろし油まゐらぬ
辨は憎まゞ

御木立の梨のみ白き宮の月素琴の御手に
すだま泣く夜か

さだすぎて宵はづかしき舞の子を花につ
つみて往ぬ春や無き

人よびて強ふべき傘の雨と降れ夜の一里
を柳に歸る

しら梅は清氏の君が筆とこそ夜をふさは
ずの歌のさかしき

しろ芙蓉妻ぶりはこる今はづかし里の三
月に歌しりし秋

琴に宵を誓ふは聖の祭の日篋に譜なきも
小指は噛まど

とがありてたそがれ島にながされし小さ
き花神か待つひとり人

春のかせ近江は情ぞただならぬ人に恍ち
る里の大津よ

とりし宿の小雨の暮の秋海棠たまくら羞
ぢし昨夜の子に似たり

野路のはこり朝のふたりの息うつくし武
藏國ばら霧紅う降れ

欄こえて石の御廊に蔦あをし薔薇がさね
の裳ひくよ變化

加茂と落ちて欄に分るる高瀬川水の人よ
ぶ夕夏ごろも

琴とりては歌高かりし春のひと春の子な
れば痩せて戀に眠る

明日は舟にぬなはとるべき近江の子水に
節よき歌をこそ賜へ　（とつぎゆく友に代りて）

宵のうたあした芙蓉にねたみもつよ黒髪
ながき秋かぞり妻

夕戸の子に詩の綵やぶれ歸る君か白鳩君
に人ことづてむ

前世の春をちひさき鐘にちりし櫻もとより宿命うすき二十とせ

京の北は彌生にちかき荒びより霰のなかに紅梅のちる

うけぞまどふはづれし爪のそらなりを十三絃のとがと強ふる神

痩を説きし腕にかさむやは肩のあれなあらざれ去年の吉備びと

春の日を懸想の歌は笑みを呼べどつひにさびしき髪ながき人

梔花染

一　大和の秋に若き旅人の歌へる

奈良を西の笠に秋見る木津の夕日河船な
がう名よびし人や

船かりぬもとより水のゐにしなれば笠に
のこらむ歌にはあらずよ

船の子は浪華へ十里秋の水木津の河橋ゆ
ふべをかくる

かくの子にとどめのこりの秋いくつ船に
ありやを西にまどふ橋

夕橋に入はひとりの秋のいろ木津川ながう大和を行くよ

おつる日やいづこ快樂の夢の里わが橋はなれ寒う行く船

伊賀いでし水のすゑ間ふ旅ならず藝術に泣かむ明日の東大寺

藝術なにさびしいかなや小笠の子まみえの神に明日の道とる

鑿の香に夜の帳かさむ情あらば木津のゆふべを霧たてこめよ

木津の橋北へ七つの欄やなにまどひすがたを水たゆたふな

かりそめの大和の水のゆふわかれ面のく
れなゐ歌にさめむや

河ぐえの夕わかうどの脚胖ぶり負はむね
たみは藝術神とこそ

橋を見ず二十なる子が秋のたび木津の家
並に夢とぎされぬ

冬

音

その船に南をぐらき奈良の山はばきとく
手に嫉みあらすな

暮を入る古き御京のものさびや寒れふし
目の子に秋掩へ

神守の古代のひと夜奈良にかりて火かげ
日記くる秋の旅びと

鑿のかをり御堂のくちのやれとびら戀の
二十の世なれぬ血なり

夕堂の羅漢の君や世ぞあはれ説くに背後
の聲ひくき人

曼陀羅に夕よる肩よこの秋を旅の子ゆゑ
の罪に瘦せざれ

塔にかかる細あや雲や奈良のひがし情あ
る旅の人は野に立つ

二春にはかに髪おろしける姉をいたむ人の歌

雨しろう梨もる夜の姉が御手鑑にかして
き春ぞと泣かる

中の子は佛性あさき春の御堂紫衣の御姉
を梨に妬まぬ

憂き春の御經ゆふべの奥の院姉と菩薩に
花ちりかかる

わかき叔母が京をいたみし圓通寺いたみ
し姉の紫衣みる春か

普門品の春二十五の現し御聲ゆふ鐘など
て姉を懲さぬ

菩薩の君花に詣での塗り傘の一の人なる
春や見ませし

花に水に七日の月のひとつ被衣歌の御供
と宵を出できな

寺の御階桃ちる月にかぞへ倦みて叔母が
讀經をまねにし姉妹

しろがさね藤によき夜のおはさむか北野
に近き姉が京の月

姉が入りし御寺の春のしら壁や藤よふた
たび御髪を誘へ

ゆるしたまへすがるによわき姉のなみだ
花ちる宵の堂の勢至よ

大門のとびらにすがる春の日や姉にしら
藤たそがれ長き

藤すぎて鐘樓にちかき後ろ御影錦の肩に
春おちむとす

うつくし

狂ひては百合のひと枝やつくり得し石に
額あて思ひ知る御名

君なくば物をおそれの魂とのみに栖む胸
しらず消えにけむ魂

おごりなりと桂の葉もて枝をもて額は打
たれむ世なきに似たり

濃きを召さばふるきもたひの御酒を斟め
戀にたふとき三とせなる老

はげし息に小琴は裂かず幸ありてなさけ
ぢからを花に相見る

少女なれば百合にうたがひ神に怖ぢわれ
らが道は歌ひおくれし

おちいらすばおちずば終によるべあらじ
地に領なき少女子の戀

ゆめみてかさめてかつよき二人なりきあ
ゝ思へどもわれ思へども

秋の里は名なし花の香井にくみてやさし
む君と朝の鐘きく

夜になでてとこあたらしと聞くに足る髪
はうつすな戸の秋の水

亡びぬるは誰がさが故のよわさ故の戀と
泣かぬを幸にこそ祈れ

戀われに胸にちひさき智慧のひとつあり
てまどひて破れかしとか
その御矢にきのふさめたるゑにしありて
白き百合の扉君にひらきし
うしなひし物か得ざりし或るものかそれ
に似たりと仰ぎ見る虹

朝寝髪

男はみな額に桂をまとふ國のむかし語の
戀にかあるべし
ゆきずりの丁子ゆかしやあけがたの夢に
見に來む山下小家

あゝ驕り高華なる人にやどる思むねに溢
るゝ我と見けらし

智慧よ疾く汝はほろびし世をうせし挽歌
に誇る我ならなくに

その胸よ春の香しみしわがいのち寶とす
るにせまかりけらし

ふりかゝる鬢の風情は汝も見つや鸚鵡病
みては我に似る瞳

祝ひたまへ少女が春の價おほしわかるゝ
期ある人の名秘むる

解し得では玉なるかひなかなしみし髮長
うては名を惜みにし

さびしみに木蓮おつとすがりにし山居の
暮も戀ふる日あらむ

笑みなきは梭うた胸にみたざるや脊戸の
緋桃がかしづきの君

今日しらず子は天雲のともなひと牲には
をしき老の母見し

髪つれなき鏡に今日を思ひ知るは靈たふ
とばぬ心にあらじか

占あしと相思の君にわがかけしよしなき
涙わすれ給はじ

ひんがしに君ある國を忘れ得ばはたやわ
が歌神を喚ばまし

したしむは定家が撰りし歌の御代式子の
内親王は古りしおん姉
こしかたやわれおのづから額くだる謂は
ばこの戀巨人のすがた
歌なきはわれあめつちに君を得て戀を戀
ひしにあらざる故か

天にてか今宵のごとき夜にぞ見しみにく
き神の衣に似る雲
牡丹こそ尺にさかずもありぬべし聖旨う
けては力をわぶる
戀するに持つも要なきつよき力すてゝ桂
の根をこやしませ

やはらぎの長きに栖みて世を知らず悲曲
ひと卷いつはり拙な

眼のかぎり春の雲わく殿の燭およそ百人
牡丹に似たり

ふたゝび無き少女の春は何と説く戀を二
樣にかたり得る君

柳でしに見るは山はふ大文字洛中出ては
妻とこそ添へ

白虹の秋の日をさす眼は父に春のうれひ
の母おびし眉　（光がうつゝゑのうらに）

わが額に冠よそはふ君とこそたのむ雄姿
老にやりますな　（光にかはりて碎雨の君に）

春野夏野われと御座はえらび給へ藝匠わ
かうて鑿あらき神

よきひとの三十路にのこすふたとせは荊
棘がもてる千とせなるべし（亡き姉の上おもひいで）
をしへ給へ永劫笑まぬ君かとぞ問ひなば
石はためらふまじか

春の神のまな兒うぐひす嫁ぎくると黄金
扉つくる連翹の花

をとめなれば姿は羞ぢて君による靈は天
ゆく日もありぬべし

變りあらむ君かや身かや人の世にしばし
ば春は來てもうつろへ

ひとつ身をわれのみ罪に召すものか御意
か聖旨か今日かれし才

兄が世は御室の宮の御弟子僧都扇折る子
にやまぶき咲きぬ

ためさむはわがものはふ力とや憂きぞ
いよいよ新たなれ春

帝を傷め鳥の孔雀よ世にひとつわれとも
汝ともよそへにし君

（ヴィクトクヤ后の御像に）

『うたがひ』はこの世の春のうたびとを「神に
解る奴僕」と過ぎぬ

あめつちの戀は御歌にかたどられ完たか
るべくさゆり花さく

ほこりてはひろふにをゆびためらひし玉
とは人をあゝ見てしかど
緋芍藥(ひしやくやく)さします毒をうけしより友のうら
やむ花となりにき
あやしむなわれと火焔(ほのほ)にやかれては姿ぞ
ほそきひと重(へ)芍藥

戀しては王者をよぶに力わびず龍馬(りうめ)きた
ると春のかぜ聽く

明治三十七年一月一日印刷
明治三十七年一月十五日發行

金三十五錢

著者　與謝野晶子
發行者　金尾種次郎
印刷者　鬼頭捨吉
印刷所　株式會社大阪國文社

不許被製

出版元　大阪市東區南本町四丁目（心齋橋通東北角）　金尾文淵堂書店（電東二〇七八番）

發賣元　東京市神田區表神保町三　文淵堂關東代理店
大阪市東區南本町四丁目　杉本書店
東京市神田區表神保町三　東京堂書店